

岩間知之（三重県立津東高等学校長）

（はじめに）

今回、「質の保証に向けた学びの支援」を切り口に、三重大学人文学部における取組に触れさせていただき、大学における教育機関としての責任を果たそうとする貴学部の姿勢に驚きました。自分が学生だった頃の一般的な大学のイメージからはもちろんのこと、10年程前の貴学部の状況と比べても隔世の感がしたからです。

1990年代以降、高校教育は多様化・個性化路線のもとに改革が進められ、高等学校の姿も以前とはずいぶん変容しました。しかし、「失われた10年」を背景に湧出した学力低下論を経て、現在、高校教育においても大学同様に「質保証」が重要なキーワードとなっています。このことは当初、大学に学ぶに足りない入学生の学力、つまり高大接続の観点から指摘されていた課題でしたが、今では、高等学校無償化施策への対応というアカウンタビリティの観点が加わり、国の方ではしきりに「コア」議論がなされているところです。このような状況のなか、今後の高校教育を考えるうえで、先行する大学改革の動きを十分に注視する必要があると感じていたところ、貴学部が知識伝達型授業から学生の意欲や主体性を重視した授業へと質的転換を図っておられること、そのためにFD活動の充実等に取り組んでおられることについて拝聴し、大いに参考になりましたことをまずお伝えします。

（学力向上支援について）

最初に、FD活動による授業改善への取組に対する意見を述べさせていただきます。最も目を引いたのは授業アンケートです。全学統一方式で課題も多いとの指摘もありますが、貴学部の「授業改善のためのアンケート」「学びの振り返りシート」は、ともに内容及び分析が充実しています。例えば小規模クラスで総合満足度が高いことやリレー講義と通常講義との比較検討など、具体的なクロス分析を通して今後の改善策が見通しやすくなっています。また、高等学校における学校評価と比較すると、ねらいとしている4つの力の定着を測るという視点からの評価が斬新です。しかし、それ以上に面白いのは「先生に続けてほしいこと」と「自分だったらこうしたいと思うこと」です。授業技法の細部の注文に陥りやすいという指摘もあろうかと思いますが、このような具体的な意見の中から、参考とすべき改善へのヒントが見つかるのではないかと感じました。わが高校も参考にしたいと思います。また、アンケート実施に対する教員の評価が総じて肯定的なことに驚きました。多くの教員が授業改善への取組に関心を持ち、かつ、それが効果的であると捉えていることの証左でありましょう。ただ、教員による「授業に関するアンケート」のところで若干気になった点として、「講義での宿題やレポート等の課題設定」の項目で「宿題もレポートも課していない」が42%もあることを指摘させていただきます。主体性育成の面から異論もあろうが、学修時間の確保の観点や質の高い学修を求めるためにも、今少し、授業外における学修に目を遣ることが必要ではないでしょうか。海外の有名研究大学と比較す

る必要はないでしょうが、授業外で相当量の文献を読ませ、自らの考えをまとめたり述べさせたりすることにより、演習のみならず講義においてもクリティカルシンキングを一層高めることができるよう、一層の工夫を期待したいと思います。

次に、カリキュラムについてですが、「幅広い教養を受信器にして専門で学ぶ」という学部長が言われるとおり、両学科のデュプロマ・ポリシーは共通に「専門的知識と豊かな教養」及び「国際社会と地域社会の発展への貢献」を掲げています。これからの時代において、とりわけ人文・社会科学系に必要とされる学際的かつグローバルな視点を携えた学びを指向しており、その方針に則ってカリキュラム・ポリシーが用意されています。その第一歩であるスタートアップセミナーにおいては、合宿活動や演習形式などが取り入れられるなど、学生の興味関心や意欲を育むという意味から、とても充実していると感じます。このことは高等学校卒業生に聞いても好評です。貴学部における初年次教育のスタイルが、効果的に定着してきたのではないのでしょうか。また、各ゼミにおいても、地域をテーマにした研究やフィールドワークなどが取り入れられており、謂わば「地方大学」としての強みを活かして学びの深化を図ろうとする姿勢が強く感じられます。

ここで教学マネジメントに関して、少し考えを述べさせていただきます。まず、人文学部に進学する生徒について、しばしば「国公立文系志望で地元の大学だから」という志望の消極性が指摘されます。しかし、本校から貴学に入学する学生のほとんどは、素直でまじめです。学修の目的やその手段・方法等を具体的に示しさえすれば、どんどんと学修が深まるように思います。謂わばそのような原石状態の学生に対して、初年時教育から専門性や国際性に誘う具体的な道筋を明確に示してやることにより、彼らはより充実した大学生活へと進むに違いありません。授業外の学修時間の確保も含めて、これらはカルチャーショックの効く一年次に培うべきことと考えます。今ひとつは、カリキュラム・ポリシーに連動したより明確で内容の濃いアドミッションポリシー（AP）を望みます。このような資質や意欲・能力を持ち、このような態度で高等学校の学習を学んだ生徒に対して、入学者選抜でこのような力を問うという具体的なAPを示すことで高大の接続がより充実するのではないかと考えます。

（留学生及び留学支援について）

なんといっても目を引いたのが、タンデム・ラーニングの取組です。双方向で互恵的な語学学習と異文化理解学習は日本人学生にとっても有効でしょう。また、この取組を起点にして、外国人学生の三重大学人文学部留学への興味関心を高め、留学生の数を増やすという方略も検討に値するように思います。さらに、ボランティアによるホームステイ受け入れ先を拡充したり、外国人留学生を本校など近隣の高等学校などへ派遣して通常授業を受講させたり高校生との交流を行ったりとかに発展させることはいかがでしょう。このように三重県と海外の若者を結ぶゲートウェイ的存在としての役割を、貴学部に期待したいところです。

一方、海外で学ぼうという学生数が少ないのが残念です。国際交流委員会の一層の奮起を望みます。また、外国語学力の育成についてもやや注力が弱いように感じます。学部卒業時の外国語学力の厳格な数値目標化や3ヶ月程度の海外留学義務づけなど、思い切ったカリキュラムが必要ではないかと思えます。人文学部も世宗大学校との国際交流プログラムが計画され、東京大学と北京大学の「京論壇」に似た取組が実施されているとのこと。大いに評価すべきであり、このようなことは高等学校等にも情報発信してほしいと考えます。さらに、一層のインセンティブとして、学生の留学経験と大学卒業後の生活に係る事例集約、大学教官の留学経験や成果等に係る積極的な情報発信、外国人教員採用数の拡大、ダブルディグリー制度の推進、留学奨学金制度や留学資金預金制度の充実、英語のみでの授業やレポート提出等を検討してはいかがでしょうか。また、人文学部として毎年の留学者数について目標値を掲げるなど、明確な施策を掲げて欲しいものです。

(その他の学生支援)

ここでも様々な工夫がなされています。地元企業との懇談会等の取組に力を入れることにより、就職率95%以上を維持していることは特筆すべきことです。また、「学部長と語る会」が開催され、そこでの意見交換を踏まえてトイレの全面改修や学生ラウンジが整備されるなどの取組がなされたと聞き、私自身も大いに参考になりました。学生生活満足度の向上のみならず、自治意識の涵養にも繋がるのではと想像します。このような取組が学生のモチベーションを一層高めていくことでしょう。

(おわりに)

自らの高等学校経営を頭に浮かべ反省しそれを傍らに置きつつ、門外漢として人文学部の取組について思いつくままに述べさせていただきました。失礼を顧みず、最後に県内高等学校の立場から少々発言をさせていただきます。一つは、三重大学人文学部は、県内で活躍する卒業生を輩出するなど、その存在感を増していると言うことです。「人文学部って何をするとところ」とかは、昔の大人の物言いです。文化学科と法律経済学科を有する強みに自信を持ち、貴学部固有の学際性と専門性を追求され、一流の志を育む最高学府を目指して欲しいと願います。そのためには、県内を重視しつつも、他県から優秀な学生を呼び込む仕掛けも必要です。他県から優秀な人材が集まってこそ、県内の高校生が一層希求する大学となりましょう。二つには、現在、大学改革で唱えられる「社会人基礎力」についてです。高等学校では「キャリア教育」でしょうか。この言葉の持つ意味の重要性は分かりますが、誤って「社会に身を合わせる能力」に導かれる恐れがありはしないか気がかりです。とりわけ人文・社会学系の大学には、知的批判的考察力と高い倫理観を携えた「社会を創造し変革する志」を育んでほしいと願います。世界的金融危機や東日本大震災及び福島原子力発電所大事故の後、今を越える力を育むのが高等教育機関の役割ではないではないかと思えます。

今後の三重大学人文学部のますますのご発展とご活躍をご期待いたします。